

平成20年度

東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要

主体性を育む幼・小・中連携の教育

～第2・第4ステージに着目して～

東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校

1. 研究の概要

主体性を育む幼・小・中連携の教育

竹早地区幼・小・中連携研究会

1. はじめに

(1) 竹早地区連携の歩み

竹早地区幼・小・中連携の歴史は古く、1986年の竹早団地再開発計画（幼・小・中の校舎改築計画）までさかのぼる。その後脈々と続いた歩みは、大きく4つの段階に分けることができる。

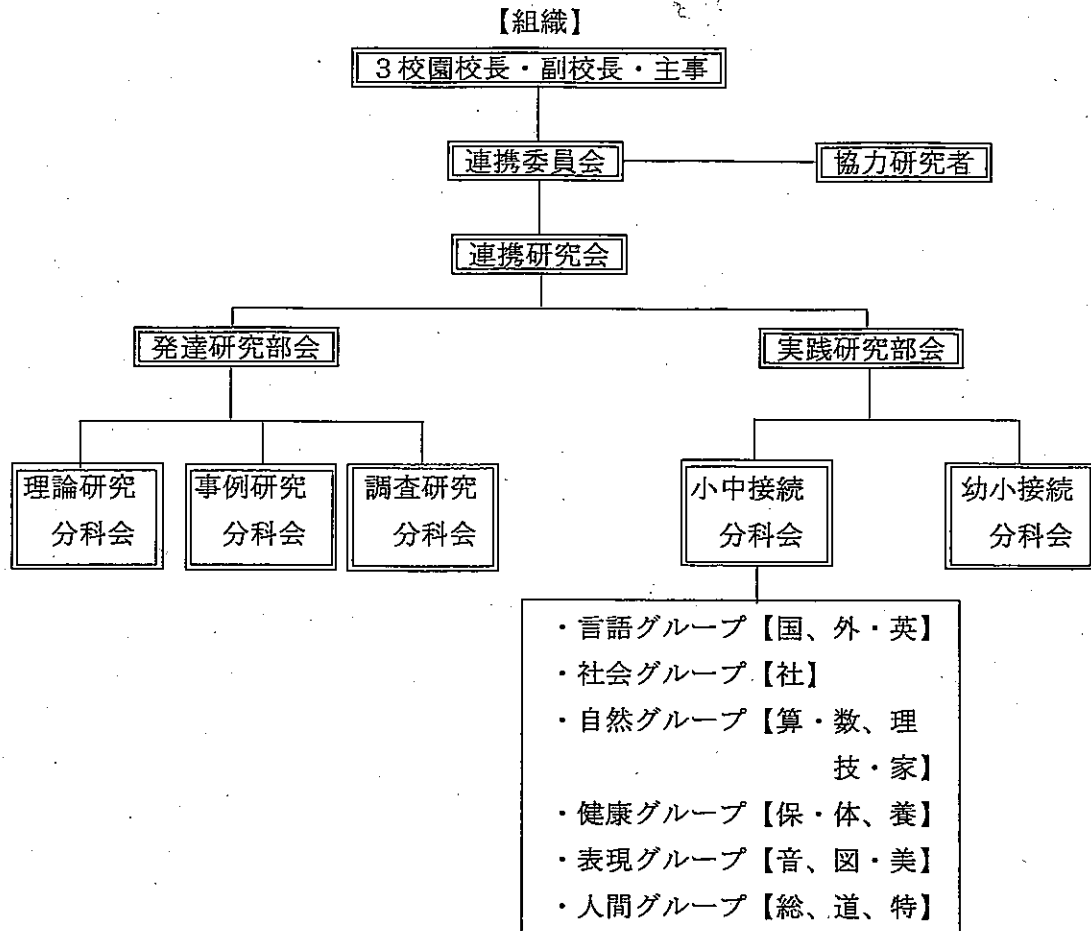
第1段階は、竹早団地再開発計画を踏まえた交流・連携で1990年まで続く。1991年からは、第2段階として校舎改築後の本格的な幼・小・中連携教育研究の検討に取り組み始めた。文部省の研究開発の委嘱を受け、幼小連携研究発表も行った。第3段階は、1995年から開始された竹早地区中学校棟（1997年完成）及び小学校棟（1999年完成）の建設の時期である。小学校棟と中学校棟がつながる一体化校舎が完成し、2000年からは具体的に、連携教育に取り組むこととなった。そして、現在までの具体的な連携教育を第4段階と考えている。

(2) 現在の取り組み

国立大学の法人化に伴う大学改革の中で提唱された中期計画・中期目標は、平成16年度から平成21年度にわたる6カ年間をかけて実施されることになった。各附属学校には特色ある地区を作り上げるための研究が要求され、竹早地区では幼・小・中連携の研究が求められた。竹早地区では中期計画・中期目標に先立って平成14年度から連携委員会を立ち上げ、平成15年度からは「主体性を育む幼・小・中連携の教育」を主題に研究に取り組み、今年度で6年次を迎えた。この連携研究において、3校園の教育目標に共通するキーワードとして「主体性」¹⁾を位置づけている。第4段階の連携研究の特徴は、幼・小・中それぞれの教員が、それぞれ子どもたちが主体性を発揮している姿を話し合い、そこから11年間の成長に見られる特徴的な過程を大きな4つのステージと小さな8つのステップとして捉えたことである。平成19年度は第1ステージ・第3ステージに、平成20年度（本年度）は、第2ステージ・第4ステージに焦点をあてて研究に取り組んできた。そして、中期計画・中期目標の最後の年にあたる平成21年度は、幼・小・中11年間を見通した連携教育の全体像をまとめ上げられるよう取り組む予定である。

2. 研究組織について

研究体制は、理論・調査・事例研究から連携教育を研究する「発達研究部会」と、保育・活動・授業等、教育活動から連携教育を研究する「実践研究部会」の2部会構成になっている。幼稚園・小学校・中学校の教員全員は、この「発達研究部会」と「実践研究部会」の両方に所属している。両方に全員が所属することによって、理論と実践、双方の情報が共有され、発達研究部会の成果が徐々に実践研究部会に反映されるようになってきた。



(1) 発達研究分科会

発達研究部会は、さらに3つの分科会（理論研究分科会、事例研究分科会、調査研究分科会）にわかれている。

①理論研究分科会

「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」を他の連携研究校の理論と比較し、また関連する文献を収集・整理し、理論的裏付けをすることを目的としている。加えて、竹早地区の子どもの実態を把握し、この「ステージとステップ」を改善していくこともねらいとしている。

②事例研究分科会

中学3年生で主体性を発揮している生徒を抽出し、その生徒の過去11年間に見られる変容から、主体性を発揮したきっかけは何だったのか等を調査し、園児・児童・生徒への関わりに対する具体的な方策の検討を重ねていくことを目的としている。

③調査研究分科会

園児、児童、生徒の変容や集団の変容を、①身体・運動 ②知能 ③対人関係 ④自己認識の4つの視点から継続的に調査し、データの共有化、各調査の蓄積・分析に取り組んでいる。また、各学年特有の傾向や年度毎の学年の傾向を把握し、「ステージ」と「ステップ」に吟味をかけ、その学年により適合したカリキュラム編成に寄与することを目的とする。

(2) 実践研究部会

各校種の保育、活動、授業をひらきあい、各教科・領域の連携カリキュラムの構想を目指している。実践研究部会は、まず大きく幼小接続分科会と小中接続分科会にわかれている。幼小の接続期だけ独立した分科会を設けた理由は、遊びや活動にまるごと浸ることでさまざまな内容を総合的に体験していく幼小の接続期と、その後成長するにしたがって学びの内容が分化していくそれ以降とは、カリキュラムの表し方も当然ちがってくると思ったからである。

小中接続分科会はさらに国語、外国語による「言語グループ」、社会による「社会グループ」、理科、算数・数学、技術・家庭による「自然グループ」、音楽、図工・美術による「表現グループ」、保健体育、健康教育による「健康グループ」、総合的な学習、道徳、特別活動による「人間グループ」にわかれて研究を進めている。

小中接続分科会を教科構成にせず、複数教科によるグループ構成にしたことによって、教科を越えて共通する子どもの姿や傾向に気付き、それをふまえて活動作りやカリキュラム作りに生かすことができるようになってきた。

3. 主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ

幼稚園から中学校までの11年間を通した子どもの主体性を考えたとき、主体性を発揮する「子どもの姿」は成長段階によって異なり、多くの教師は子どもたちとの関わり方を経験的に変えていることであろう。竹早地区の子どもが「主体性を発揮している姿」とはどんな姿なのかを幼稚園、小学校、中学校の教員で洗い出し、そこから11年間の成長に見られる特徴的な過程を4つのステージと小さな8つのステップとしてとらえた。もちろん、成長の過程は、子ども一人一人に個性があるので、ある子によっては、ステージ・ステップと違う姿を見せることは当然ありえる。しかし、こうした成長のステージとステップという、あくまで、共通のめやすをもつことによって、校種の違う教員間でも11年間の子どもの成長についてイメージを共有し、教員一人ひとりの子どもを見る視野を広げるために有効であると考えている。

(1) 各ステージの概略

①第1ステージ（幼稚園から小学校2年生前半まで）

「やりたいことを思う存分やろうとする時期」であり、安心感や親しみを抱く中で、友達や遊びへの関心が広がりが見られる。

②第2ステージ（小学校2年生後期から小学校4年生前期まで）

「集団との関わりに浸る時期」であり、時には自己主張をしながら積極的に友達関係を広げ、仲間との学び合いを楽しむ、まさに“小学生らしい”姿を見せる。

③第3ステージ（小学校4年生後期から中学1年生まで）

「集団と自分との関わりの中で、自分とは何かを意識する時期」であり、集団の中で自分らしさを求め、新しい知識や技術をどんどん吸収しようとする姿を見せる。

④第4ステージ（中学2年生から中学3年生まで）

「集団の中で自分らしさを追究する時期」であり、心と体が不安定になり戸惑いを見せることもあるが、自己の適性を客観的に見つめ目的をもった主体性が芽生えてくる時期である。

成長の4ステージと8ステップ											
校種	幼稚園		小学校						中学校		
学年	4歳	5歳	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
ステージ	第1ステージ 4歳～小2前期 やりたいことを思う 存分やろうとする		第2ステージ 小2後期～小4前期 集団と自分との 関わりを深める			第3ステージ 小4後期～中1 集団との関わりの中で 自分と集団を意識する			第4ステージ 中2～中3 集団の中で 自分らしさを追究する		
ステップ	ステップ 1 4歳～ 5歳前期		ステップ 3 小1後期～ 小2前期			ステップ 5 小4後期～ 小6前期			ステップ 7 中2		
	ステップ 2 5歳後期～ 小1前期		ステップ 4 小2後期～ 小4前期			ステップ 6 小6後期～ 中1			ステップ 8 中3		

(2) 本年度焦点をあてたステージ²⁾

①第2ステージの子どもたちの姿（小学校2年生後期から小学校4年生前期まで）

この時期は、「集団と自分との関わりに浸る」時期で、自分一人で何かの活動に夢中になって取り組むことより、周りの友だちと一緒に取り組むことを好むようになる。ところが、子どもたち一人ひとりの成長には個人差がある。一人ひとりの興味関心の広がりや、これまでの第1ステージとは比べものにならない。大きな個人差をかかえた子ども同士が教室で一つの活動をともにするので、子ども同士のそれぞれの「思いや願い」がぶつかり合うこともあるだろう。第2ステージは、仲間との学び合いを好むと同時に、「子どもたちが、それぞれの思いや願いをぶつけ合う」という特徴的な姿をみせる。

この時期に大切にしたいことは、この「それぞれの思いや願いをぶつけあう」姿を「揉み合ってお互いが成長していく姿」と肯定的に捉えることである。そして教師は、一人ひとりへのかけがえのない存在として役割があり、考えや経験が広がるような活動を構想することや、自分の思いや考えを表現し伝え合う機会を十分にとること、子どもたちが自分自身をしっかりふり返り、見つめる場を設定することを心がける必要がある。

②第4ステージの子どもたちの姿（中学2年生から中学3年生まで）

第4ステージは、「集団の中で自分らしさを追求する」時期である。と同時に第4ステージの初期は、心と体の不安定な時期でもある。身体的成長過程に戸惑い、精神的な成長とのギャップで素直になれない行動が出てしまうこともある。しかし、生徒会活動や部活動、学校行事等で仲間と協力し合い、意欲的に取り組んでいく場面もみられる。また、第4ステージ後半になると、自分を客観的に見られるようになる。そして、自分の適性も理解してくるようになる。精神的にも落ち着き、自分の適性に合った場面で主体性をおおいに発揮するようになる。

この時期で大切にしたいことは、まず、生徒に任せる部分と教師がリードする部分を明確にすることである。また、全体指導で十分伝わるが、それでも個に対してじっくり向き合い、話を受け止めて一緒に解決の糸口を探っていく姿勢を心がける必要がある。

4. 実践からカリキュラムをつくる

本地区は、“まずカリキュラムありき”ではない。カリキュラムを作成するにあたって、各グループ・教科とも共通しているのは、縦軸を「ステージとステップ」にすることだけである。カリキュラムの内容を区分する横軸はグループ・教科ごと独自に設定しているものもあれば、グループで共通に捉えているものもある。いずれにせよ、先に枠組みがあり、内容をその枠にあてはめていくことではない。また、幼稚園は幼稚園のカリキュラムをつくり、小学校は小学校のカリキュラムをつくり、中学校は中学校のカリキュラムをつくり、それをただ単につなぎ合わせて連携のカリキュラムをつくることでもない。幼・小・中校種を越えて、お互いの実践をひらきあい、実践中に見られる姿を通して、主体性を育む連携カリキュラムを作成している。また、教師が各自持っている「自分の研究教科」の視点だけから見るのではなく、言語グループ、自然グループ、表現グループなどのいくつかの教科をくくったグループや発達研究の側面からも検討することで、カリキュラムの修正を加えている。実践を通しながら、カリキュラムを更新し、また実践を行う、このような終わりのない営みが竹早地区独自のカリキュラムづくりとなっているのである。

(1) 幼小接続分科会のカリキュラムづくり

「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」では、幼小の接続期を第1ステージ上にあるととらえている。幼稚園、小学校と環境が変わっても、「主体性」の表れ方から見ればその特徴は継続されていると考えているからである。だから、環境が変わるこの時期は、小学校の集団を中心としたスタイルに早く慣れさせるよりも、まず、友達に対する安心感や学校への親しみの感情を育てることが大切である。そして、幼稚園から小学校へなだらかに接続するという姿勢をもって、小学校の初期にあたるカリキュラムをつくっている。

まず、幼稚園の年長期と小学校の入門期に幼児・児童と担任は、いったいどんなことをしているのか、単に行事や授業だけでなく、学級指導や休み時間の過ごし方を含めて洗いざらい出し合う作業を進めた。その中で、その年独自なものもあるが、共通して行っているものも見えてきた。それは、教科というような枠組みではくくれないが、竹早小学校独自のカリキュラムになっていくと考えている。

また、この作業を通して幼稚園の生活と小学校1年生の生活を比べてみると、まれに逆転現

象が起きていることにも気づく。このような事例を通して、幼稚園の「無理のないゆったりした個の関わりを大事にするスタイル」から小学校の教員が学び、小学校の初期のカリキュラムに生かしていくこともできた。

ここで出てきた学びの場や活動内容は、一度カリキュラムに位置づけたら変更せず固定したものとして扱っていかう、というわけではない。常に実践を通して見えてきたものをカリキュラムに反映させるため、更新していくことが大切だと考えている。

一方、カリキュラム上に固定しておく活動もある。例えば、「キッズフェスティバル」という学校行事のことである。この行事は、2年生が中心となってお話をつくり、そのお話に沿って幼稚園児と1、2年生が身体表現を行うストーリー仕立ての発表会で、竹早幼稚園小学校独自の行事である。同じ行事でも年齢を経て回を重ねる毎に参加する意味が違ってくる。繰り返すことにより安心感を持ちつつ、自分を出せるようになっていくのである。子どもたちは、この価値ある行事を経験することを経て、第1ステージから、第2ステージに移行していくのである。

現在、幼小接続分科会では、このように、幼稚園から小学校に接続する時期のカリキュラムを、やや自由度のある活動と固定的な活動を、有機的に結びつけながら作成している。

(2) 小中接続分科会のカリキュラムづくり ～表現グループ：音楽科の例～

新しい音楽科の指導要領では、表現領域の「歌唱」「器楽」「音楽づくり（中学校は創作）」の3分野と鑑賞領域、及び共通事項にあらたに整理されて、内容が構成されている。文京区では新指導要領の各項目によるマトリックスと現行の「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」の4観点を柱として、カリキュラムを作成している。これに対して、本地区音楽科では、時間軸を全教科領域共通の4ステージと8ステップとし、内容軸を次のような「場」「手段」「関係」「文化」の4観点を音楽科連携カリキュラムを作成しようとしている。これは、表現グループの図画工作・美術と同じ4観点になっているものである。

「場」…子どもたちが主体的に音楽活動に取り組むための、活動領域、学習形態

「手段」…子どもが主体的に学ぶために、音楽活動の中で注目すること、表現すること

「関係」…主体的な学びや成長につながる子どもたちの関わり合いの姿

「文化」…その教材や活動によってふれることのできる音楽的・歴史的背景

現在共通理解しているのは、ステージ毎に重点をおいて単元全体の活動展開を考えるということである。「集団との関わりに浸り、仲間との学び合いを楽しむ第2ステージ」では、「関係」に、「集団と自分との関わりの中で、自分とは何か意識する第3ステージ」では、「場」に、「集団の中で自分らしさを追究し、自己の適性を客観的に見つめる第4ステージ」では「文化」に重点をおいている。

この連携カリキュラムの作成とは、指導要領と同じ内容をただ配列する作業ではなく、その内容を4つのステージにおよぶ主体的に表現する子どもの姿と表現グループの独自の4観点に照らして解釈し、再構成する作業なのだ捉えている。

第2ステージの子どもたちの、ふぞろいなながらも表現が生き生きしていること。それが少しずつお互いの音に関わり合って、つながり合って、重なり合って、第3ステージのまとまり

ある表現へ変化していくこと。そしてその後、第4ステージでは、ピアノやギター、ドラムなど、音楽に対する個人的な関心が高まったり、自分の好きな音楽について教師と話したりすることを楽しむ姿も見られるようになる。こうしたステージによって変わっていく子どもたちの特徴をとらえて、活動の設定や展開が、どうあるべきかを考えながら、カリキュラムを作成している段階である。

5. 成果と課題

今年度は、第2ステージと、第4ステージに焦点をあてて研究を進めてきた。しかし、一番小学生らしい姿を見せる第2ステージの子どもたち、一番中学生らしい姿を見せる第4ステージの子どもたちの授業を、校種を越えて公開していったことで、新たに見えてきたことがある。

- 『「そのステージらしさに浸ることが、次のステージの支えになっていることを実感した』
一見ごちゃごちゃしたように見える第2ステージの子ども同士のおつかり合いは、実は仲間意識が育む大切な学びの場であり、その場を経験してこそ、「集団と自分の関わりの中」で自分を意識する第3ステージに進んでいけるのである。このように、そのステージらしさを見せているということは、直接成果に結びつかないことでも次のステージの支えになっていると意識できるようになった。
- 『校種をこえて、ある一人の子の変容を語り合うことができるようになった』
その子の成長や変容を現在の様子だけでなく、過去の様子からも含めて、連続した線で見えていくことができるようになった。
- 『子どもの姿からカリキュラムづくりをしていくことができるようになった』
イメージでしか捉えられなかった、他校種の子どもたちの姿も実感することができ、既存のカリキュラムを、自分たちの実践から切り口をもって解釈していく中で、竹早地区独自のカリキュラムの柱が見えてきたり、教材の見方が広がった教科もでてきた。
- 研究の母体を「グループ」でも「教科」にしてもよいとしたことによって、
『グループ内で見合ったからこそ、よく似たカリキュラムの柱がたてられたグループもでてくるようになった』

今後の課題としては、

- 『それぞれのグループ・教科の視点からさらに子どもを見とり、ステージ・ステップをよりよいものにしていくこと』
- 『ステージ・ステップで見とってきた子どもの姿をどう解釈し、“教材の選び方”や“場の設定”をカリキュラムに位置づけていくのか、それぞれのグループ・教科で模索をしているところである。

<参考>

1) 本地区における「主体性」とは、「子どもがよりよく生きるために、自分（あるいは集団）の願いに基づき、自らの意思・判断で行動しようとする姿勢や態度」のことをさす。

平成20年度連携研究会

実践研究会 年間活動実施記録

月	日	曜	会場	言語グループ	社会グループ	自然グループ	健康グループ	表現グループ	人間グループ	月	日
4	18	金	井口, 西澤公開保育 講師なし	過去の实践, 指導要領, 教科書の分析 (国)	年間計画		テーマの検討	講師入選	人間グループ	4	18
5	8	木	・カリ作りに向けて ・見とりの表 (1学期) 検討	・小学校での活動例集約 (外)	・昨年年度連携カリ再検討 ・地理分野検討 ・歴史分野検討	・心通しの確認	・心の健康「人とのかわり」を中心として各 スラージの問題や課題 を検討	・カリキュラムの検討 (10月まで)		5	8
6	10	木								6	10
7	27	火	・カリ項目検討	・7年分のカリ目標大筋 で検討 (外)	・公民分野の検討	・カリキュラムの観点協 議	・研究の着眼点の絞り込 み	・求める子ども像 (10月まで)		7	27
8	28	火								8	28
9	11	木							金田知之活動研 講師 松尾直博 (東京学芸大学)	9	11
9	19	金	宮崎佐智子活動研(2-2) 講師 田近祐一 (東京学芸大学名誉教授)	・聞く, 話すの中小連携 (国)			・具体的な授業内容の検 討			9	19
10	7	火	・カリ項目とその表現の 仕方の検討	・聞き, 話すの中小連携 (国)	佐川勝史活動研(4-1) 講師 森本信也 (東京学芸大学大学院教授)				・人間グループの位置づ け	10	7
10	31	火		・カリ検討 ・授業案検討	・上岡授業研(中3) 講師 なし		・授業案検討		・授業案検討	10	31
11	14	金				山田剛史活動研(3-1) 講師 中村孝史 (山梨大学)				11	14
11	21	金	権安珠活動研(4-1) 講師 馬場哲生 (東京学芸大学)							11	21
12	2	火	松津英恵授業研(中2) 講師 下村勇三郎 (前日本橋学短大学)			小野瀬倫也授業研(中3) 講師 森本信也 (東京学芸大学大学院教授)				12	2
12	11	木			・3分野の詳細検討	・カリキュラム協議	・評価の方法と分析の観 点	・紀要検討 ・指導計画の具体化		12	11
発表研究会 報告会											
1	13	火								1	13
1	23	金	事前研 井口直美(4歳) 西澤彩木(5歳) 講師 岩立 (東京学芸大学)	(12/1)事前打ち合わせ 講師 田近祐一 (東京学芸大学名誉教授) 馬場哲生 (東京学芸大学)	・紀要原稿 ・公開研準備	田中幾久事前研(中2) 講師 中村孝史 (山梨大学)	(2/6)事前打ち合わせ 講師 松田恵示 (東京学芸大学)	桐山拓也事前研(3-2) 講師 春日明夫 (東京造形芸芸大学) 谷本・居城事前研 講師 酒原和子 (お茶の水女子大学附属小学校)	金田・横山事前研 講師 松尾直博 (東京学芸大学)	1	23
2	12	木	・紀要原稿 ・公開研準備		・紀要原稿					2	12
2	14	土	井口直美(4歳) 西澤彩木(5歳) 公開のク 公開のク	権安珠(4T) 宮崎佐智子(2D) 講師 田近祐一 (東京学芸大学名誉教授) 馬場哲生 (東京学芸大学)	山田剛史(中2) 田中幾久(中2) 佐川勝史(4T) 勝岡幸雄(中2) 講師 中村孝史 (山梨大学) 森本信也 (東京学芸大学大学院教授)	山田剛史(2-1) 講師 松田恵示 (東京学芸大学)	桐山拓也(3-2) 阿部真主(中2) 谷本直美(3-1) 居城勝彦(中2) 講師 春日明夫 (東京造形芸芸大学) 酒原和子 (お茶の水女子大学附属小学校)	金田知之(4-2) 横山直博(中2) 講師 松尾直博 (東京学芸大学)	2	14	
3	10	月								3	10